

課題番号 10

コンパートメント境界形成モデルにおける細胞表面張力の実測

[1] 組織

代表者：井上 高良
(国立研究開発法人 国立精神・神経医療
研究センター：以下 NCNP 神経研究所)

対応者：小椋 利彦
(東北大学加齢医学研究所)

分担者：浅見 淳子 (NCNP 神経研究所)
井上 由紀子 (NCNP 神経研究所)
久保 純 (東北大学加齢医学研究所)
野村 慎一郎 (東北大学工学部)

研究費：物件費 24 万 2 千円，旅費 10 万 8 千円

[2] 研究経過

個体の発生・分化・加齢に関わる研究・開発は、近年その重要性を増しつつある。本共同研究課題では、脊椎動物に共通で、脳・中枢神経系の発生過程においてきわめて重要な役割を果たすコンパートメントユニット (neuromeres: 詳細は図 1 A 参照) の境界形成・維持メカニズムを独自のモデルシステムや実験系を駆使して細胞・分子レベルで明確にすることを主目的とした (詳細は図 1 B 参照)。

これまでに研究代表者らは、マウス初期胚コンパートメントユニット間で differential な発現様式を示す細胞間接着分子カドヘリン (参考文献 1-3) に着目し、異なるカドヘリンサブクラスを発現する培養細胞を二次元で混和するだけでコンパートメント様境界が形成されることを見出している (論文未発表)。そこで本共同研究課題では前年度から引き続き、この境界形成モデルを脊椎動物生体の脳・神経系の状況へより近づけるため、すべての神経上皮細胞で発現している細胞間接着分子 N-cadherin をマウス繊維芽細胞由来の L 細胞に安定導入した新規細胞株を樹立し、それら多重カドヘリン導入細胞群を用いて二次元混和培養を行った際にできるコンパートメント様境界形成において細胞の表面張力がどのように分布するのかを、物理的手法や各種力覚関連遺伝子

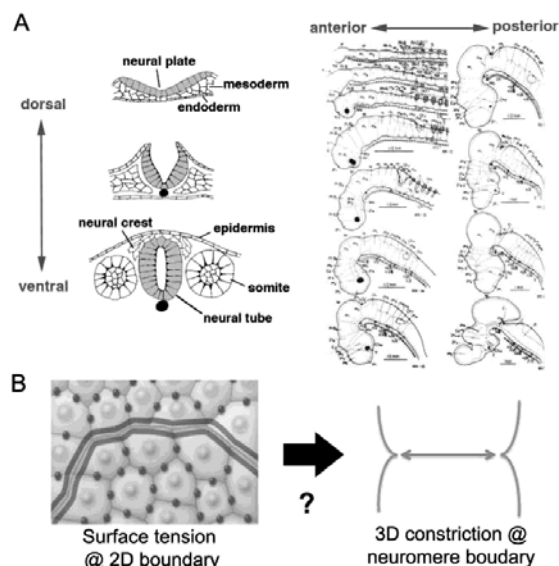


図1: A (左) 脊椎動物中枢神経系の発生は一層の細胞シートからなる神経板 neural plate が巻き上がって神経管 neural tube となってくびれ切れ、それが内部に陥入するところから始まる (時間: 図の上から下へ進行)。 (右) Hamburger・Hamilton によるニワトリ初期胚の発達様式 (時間: 図の左上から右下、そして右上から右下へ進行)。神経板/管には、前後軸に沿って順次『くびれ』が生じ、これら『くびれ』を基点として神経管が精妙に折り畳まれることによって脳のプロトタイプ (右下) が創られる点に注目。これら『くびれ』の幾つかが互いに細胞が混和しないコンパートメントユニット neuromere の境界として定義できることがわかってきた。B (左) 研究代表者が構築した 2D 細胞シートモデルによると異なるカドヘリンサブクラスの発現境界部 (図の中央部) に太い 2本のベルトで示したアクチン細胞骨格を基盤としたネットワークが形成され、これらが作用することで強い表面張力が生じるとともに、細胞同士の混和が制限され、コンパートメントユニットが産み出される可能性が示唆されている (研究代表者未発表データ)。 (右) 脊椎動物の中枢神経系発生過程で認められるコンパートメントユニット neuromere の境界部は必ずくびれており、これが神経管の折り畳みによってできる脳の 3D 形態表出の基盤となっている (A 右)。この『くびれ構造』が 2D 細胞シートモデルのコンパートメント境界部で認められる表面張力制御機構とどのような関係にあるのかを探るのが本研究の最終目標である。

の動態観察によって初めて体系的に明らかにすることをめざした。以上の計画立案と遂行に際しは、加齢研小椋研究室固有の研究基盤と、小椋研究室が東北大学工学部野村研究室と共同開発した先端技術基盤の応用を中核課題と位置づけ、どのような技法が細胞表面張力の実測に有効なのか、またどのような力覚関連遺伝子群の導入を行うべきなのかをさまざまな角度から画策した。

[3] 成果

(3-1) 研究成果

本年度は、以下に示す研究成果を得た。

まず、新規モデル細胞株 (=cadherin::XFP double transfectants :N-cadherin) をマウス繊維芽細胞由来L細胞株で安定発現させることで神経上皮細胞様に変化したクローンを単離し、そこへtet-ON誘導ベクター系を用いて各種カドヘリンと蛍光分子を異なる組み合わせで同時発現可能とした細胞株群、もしくはcadherin-XFP transfectants : カドヘリン-蛍光分子融合蛋白を誘導発現可能とした細胞株群) の樹立に成功し、これらを二次元混和培養すると強固なコンパートメント様境界が形成されること、その境界形成ダイナミクスはROCK阻害剤添加で完全に抑えられる、つまりカドヘリンを基盤としたアクチン骨格系の動態制御がコンパートメント境界形成に必須であること、そして境界付近におけるカドヘリン分子の局在やROCKの下流でリン酸化されて活性型となるミオシン軽鎖 (pMLC-Ser19) の局在様式を新たに確認した。

次に、上記モデル細胞株に力覚関連遺伝子のひとつであるYapのEGFP融合蛋白質導入を試み、境界形成に依じてどのような局在変化が認められるのかについて解析が進行中である。これと同時にストレッチチャンバー上で上記モデル細胞株を培養し、チャンバーに平面方向の張力をかけることによって境界部の細胞ダイナミクスやYapを含めた力覚関連遺伝子の発現動態を探る実験も開始した。

さらに細胞表面張力の実測にむけてコンパートメント境界形成モデルへGiant Unilamellar Vesicleとの電氣的融合を用いた磁性パーティクル導入を試み、0.2および1 μm 径のものに関しては細胞あたり数十個のパーティクルが~80%の細胞に取り込まれる条件を見出した。今後はさらに大きな径のパーティクルを効率良く導入できる条件を確立し、磁気による細胞張力測定に用いる予定である。またこれらは上記培養モデルのみならずマウス胚においても独自に醸成したトランスジェニックシステム (参考文献3, 4) あるいは全胚培養系への電気穿孔法 (参考文献5, 6) によって導入を行う準備中を進めている。

(3-2) 波及効果と発展性など

本共同研究により、研究者間の交流が飛躍的に活性化し、当初予定していたコンパートメント境界モデルにおける細胞表面張力の実測に留まらず、小椋

研で機能解析が進行中の力覚関連遺伝子群の役割をコンパートメント境界モデルもしくは発生マウス個体で考察するステップへと進捗した。また、本共同研究で得られた結果は、平成29年度東北大学加齢医学研究所共同利用・共同研究課題の継続申請等に結びつき、今後さらなる発展が期待されている。

[4] 成果資料

本年度において本共同研究からの直接的な成果論文は無いが、今後の研究展開の基盤となる成果として以下の論文を発表した (本研究課題参画者に下線)。

- (1) Egusa, S. F., Inoue, Y. U., Asami, J., Terakawa, Y. W., Hoshino, M. and Inoue, T. (2016). Classic cadherin expressions balance postnatal neuronal positioning and dendrite dynamics to elaborate the specific cytoarchitecture of the mouse cortical area. *Neurosci. Res.* 105, 49-64.
- (2) Inoue, Y. U. and Inoue, T. (2016). Brain enhancer activities at the gene-poor 5p14.1 autism-associated locus. *Sci. Rep.* 6, 31227.

参考文献 (本研究課題参画者に下線)

1. Inoue, T., Chisaka, O., Matsunami, H. and Takeichi, M. (1997). Cadherin-6 expression transiently delineates specific rhombomeres, other neural tube subdivisions and neural crest subpopulations in mouse embryos. *Dev. Biol.* 183, 183-194.
2. Inoue, T., Nakamura, S. and Osumi, N. (2000). Fate mapping of the mouse prosencephalic neural plate. *Dev. Biol.* 219, 373-383.
3. Inoue, Y. U., Asami, J. and Inoue, T. (2009). Genetic labeling of mouse rhombomeres by Cadherin-6::EGFP-BAC transgenesis underscores the role of cadherins in hindbrain compartmentalization. *Neurosci. Res.* 63, 2-9 [Cover Article].
4. Asami, J., Inoue, Y. U., Terakawa, Y. W., Egusa, S. F. and Inoue, T. (2011). Bacterial artificial chromosomes as analytical basis for gene transcriptional machineries. *Transgenic Res.* 20, 913-924.
5. Inoue, T. and Krumlauf, R. (2001). An impulse to the brain-using in vivo electroporation. *Nature Neurosci.* 4 Suppl., 1156-1158.
6. Osumi, N. and Inoue, T. (2001). Gene transfer into cultured mammalian embryos by electroporation. *Methods* 24, 35-42.